

人麿作歌の異伝

一、異伝と人麿

一口に異伝と言っても、一首中の或る詞句についていう場合と、一首の大部分ないし全体についていう場合とがある。従来は、本文の詞句と異伝句との比較、本文の形象の度合と異伝歌のそれとの比較、といった二つの方法を併用して考え、異伝は、(一)作者の推敲過程を示す、(二)伝誦によって生じた転訛である、(三)作者の推敲と伝誦過程で生じた転訛とが重なったものである、等の見解があった。

最近では、人麿作品に註記された異伝句は人麿自身の措辞であって、本文の詞章はその定稿であるとする傾向にあるようである。しかしこの方向のみをもって人麿の異伝歌・異伝句を律するわけにはゆかない。殊に、或

尾崎 暢 映

云、一云と註された異伝句のすべてを、人麿作品を保存する上で生じた伝誦者・書写者による損傷でなく、「人麿自身が自作を人に示す場合にいろいろに語句をかえて示したのを、編纂者がそれを参照して書入れたものである」(沢瀉氏注釈)とするのは、行きすぎであろう。

なぜなら、人麿自身による歌稿を切り継いで——あるいは精確に転写して——編成したものが人麿作品であるとか、人麿作歌と人麿歌集は「一人の手によって書かれたのであり……人麿の書いたものが、そのまま写され伝えられている」(『万葉の争点』所収、稲岡氏「人麿と人麿歌集」)とするには、なお多くの問題があるからである(後述)。

文字使用のはじまった時代に、文学以前の文学がすでにできており、万葉時代に入っては伝誦もされた。口頭

伝誦による方法がしばしば原形を損うことは言うまでもない。一方、筆写しても誤写・誤脱を生ずることは多い。万葉集に見る人麿作歌の本文および異伝句が人麿自身によるものでないかぎり、ないしそれを誤りなく書写したものでない限り、転写に当っては、こうした損傷は生じやすかつたはずである。一体、万葉編纂当時における人麿作品の伝来・保存状況については、万葉集は何も伝えない。それゆえ、如何様な説明でもできる。

人麿作歌の本文ないし異伝句が人麿自身の標記を正しく伝えているという確証はない。高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麿作歌の「或書反歌」(2・210)に

右一首類聚歌林曰、檢限女王怨泣沢神社之歌也。

案日本紀二曰、十年丙申秋七月辛丑朔庚戌後皇子尊薨。

とあるなど、却って、編纂者にとってその歌が人麿の真筆であるとか、真正の人麿作であるとかいうように決定できない事情のあったことを裏書きする。大宝元年に紀伊行幸のあった際の作と思われる「白浪の……」(1・三三)の歌は卷九(二七一六)に重出していて、歌詞に小異があり(歌経標式では作者は角の沙弥であり、詞句も万葉卷一・卷九のそれと少し異なる)、作者が川島皇子・山上憶良の二通りになっているのも、そのことを傍証する。とい

うのは、このとき人麿も從駕していた(1・四五、2・一四六番歌とその題詞・左註を参照)らしいからである。万葉編纂当時、すでにこうした状況にあったからこそ、人麿の歌が原形からいよいよ遠ざかるのを恐れた編者は、異伝を註記して後代への参考資料としたわけであろう。

いま、異伝句の実例について見よう。一三一番歌の「磯なしと 人こそ見らめ」「よしやし 磯は無くとも」などの句は、現地の地勢を無視したもので、落ちつかない。また、「石見の海打歌の山の」(2・一三九)の句なども——打歌が打歌角の誤脱であるとしても——意味が通らない。これがもし作者自身による措辞なら、表現はふつつかでも、何を言っているかだけは解るだろう。

沢瀉博士がいわれたように、人麿作と見られる幾通りかの歌稿のうち、「編纂者がすぐれていると認めた方を本文にし、他をA或云Vへ一云Vとして書き添えた」ということは考えられよう。かつ、或云・一云・又曰の方が作者の「初稿乃至未定稿である場合が多い」ということも認められよう。しかし、その或云・一云・又曰の異伝句が作者の表現を誤りなく保存しているか否かに先ず問題がある。なぜなら、伝誦者の伝え誤り・書写者の書きあやまり以外に、詞章はこれに接する人々によって意識的にも無意識的にもその時代の理會に近いように改め

られるからである。沢瀉博士は、人麿は自作を他に示す場合にいろいろに詞句を変えて示したのだと言い、編者がそれを参照して異伝句として書き入れたのだとされたが、人麿自身による歌稿が幾通りも編者の手もとにあったとは考えにくい。或る種の作品については人麿自筆の初稿・改稿・定稿もあつたかも知れないが、編者の手もとにあつたものの多くはやはり、人麿ならざる書写者が伝写したものであつただろう。宝龜三年に成つた歌経標式に引く、人麿作と称する歌詞が、万葉所載の同じ歌のそれと細部で異なるのも、そのことを語る。これについては、土屋氏の万葉集私注でも、一三八番歌（或本歌）では数句のむだな句が増補されているとする。そしてそのことから考えれば、一三五番歌の「嬌こぼ隠る 屋上の山の 雲間より 渡らふ月の 惜しけども 隠かくらひ来れば」の句など、あるいは後で挿入されたのではなかったか、とする。

二、異伝と転写

従来、伝誦者による訛伝と作者自身による推敲との間には、区別が立っているようであつていなかった。両者は本来別次元のことからである。それにもかかわらず、異伝句が転写の間に生じた校異の記録でなく、作者の推

敲がもたらした表現の一過程であるとする見かたがある。それは概して、本文の方が異伝歌・異伝句よりも立ちまざっているからであつた。（しかし、例外もある。巻二の一九五番歌の第四句など、これである。この種の例は、他の作者のものにもある）。すぐれたものは推敲の結果得られたとすることは、誰しも考えることだからであつた。

しかしその仮定の上に立ち、そのことを移して、異伝歌・異伝句のほとんどすべては人麿自作のおもかげを存しているとなし、用字・用語・作品構成などの面から作者の推敲過程を跡づけようとしたり、人麿作品の形象された時処・順序を入れかえて考えたりするところに、無理がある。それらの見方も一応必要であるが、不用意な推定には必ず誤りが混じて来よう。

なによりも、古代の作品は、厳密に一つの内容ばかりを考えさせるようには出来ていなかった。しかもまた、作者自身、先行の用語を誤解して用いたり（18・四〇九八）、文字を変えて用いただけのものを、後世の編者が訓みあやまったり（2・一三五、その他）、二通りの書きかたをした同一句（2・一三七、一九五）を別の句のように考えなしたりすることもあつた。こうした点を考えただけでも、万葉の異伝歌・異伝句の出自を論ずるには慎重な対処を要することが知られる。作者がどのような過程

を経て本文の表現に到達したかを考えることは、必要である。しかしたとえ、定稿に至るまでの表現過程を考えて、伝誦面からでなければ説明できない表現・文字の異同は何もないとし、人麿の羈旅歌(3・二四九―二五六)を天平八年の遣新羅使の誦詠した古歌(15・三六〇六一―三六一〇)並びにその左註に言うところとくらべて、定稿系と未定稿系とにふり分け、遣新羅使人の誦詠した歌は定稿系と未定稿系とに分れるとする前に、そこにあらわれた本文・異伝の双方が純正な記録であるかどうかを、先ず糺してかからねばならぬ。

神野志隆光氏も、人麿作品の形成過程と推敲の問題を詳考した一人である。その論において氏は、いわゆる石見相聞歌の反歌については、長歌との働き合い、また反歌相互間の連関をも意識して、長歌反歌が一つの構成体となるような反歌の在りかたの追求と達成を石見相聞歌の形成に捉えるべきである、とした。そして、一三三番歌の創出を発想・用語などの面から考えて、これを三段階にわけ、それらの段階の差は推敲によって生じたのだろうと説いた。

作家である以上、人麿も当然、構想の練成・改稿・推敲をかさねただろう。現にその証蹟もある。異伝歌・異伝句の或るものも、推敲途上の措辞の遺ったものである

かも知れない。しかし一方、その異伝歌・異伝句には——あるいは本文にも——伝来の途上で過誤を生じ、作者の原表現から隔ったものが混在しているよう。そして、その原形を損じたものが作者による原表現と考えられたりしただろう。そうであるなら、それは推敲過程を考えるべき資料というよりも、訛伝の姿に近くなっていただろう。

例をあげる。人麿作品の或るものは、天平八年の遣新羅使によって誦詠されたのであり、それらの中には、「玉藻刈る平等女を過ぎて」(15・三六〇六)のような句をもつものがある。平等女の語は、伝誦者ないし書写者が地名のように思いあやまったか、故意に改めたかの、いずれかであろう。(思いあやまるにしても、また改めるにしても、それだけの理由がある。吉永登氏の『万葉その異伝發生をめぐって』の著では、人麿の歌についても、幾つかのこの種の実例をあげられている。といっても、平等女については、作者自身、このように表現したことがあったとは思われない。平等女を処女塚周辺の地名とするのは無理だからである)。伝来の途上で伝誦者——ないし書写者——が「敏馬」(3・二五〇)を平等女に改めたにしても、万葉編纂の段階では、この歌については卷三の編者は卷十五の方と、卷十五の編者は卷三の記載の方と照合し、疑問をもったようである。

またたとえば、「楽浪の志賀」(1・三二)も「楽浪の比良」(異伝)の改稿であると言えぬ。比良の地は「天離る 夷にはあれど」(1・二九)と歌われたその「夷」の象徴であつたし、似た音韻の誤想(ヒナ↓ヒラ)によって瞬間的に語の変化と意味の調整とが加わつた、とも考えられるからである。

このようなことを稿者が言い立てるのは、万葉の時代では人麿作歌の抒情の世界は共有され、伝誦され、転写されたからである。概していえば、人麿は歌道の大先達であつた。そして当時、この作者には伝説上の作家の観すら附帯した。万葉集に「或るは云ふ、柿本朝臣人麿の作れるといふ」の左註をもつ歌(3・四二三、9・一七六一、一七六二)や万葉集所載の逸名氏の歌(万10・二一九三、13・三三二五)を、歌経標式に人麿作とするのは、そのことを示す。このほか、卷十三の長歌には人麿作歌なし(人麿歌集所出歌とのかわりと思わせるもの(13・三二五三、三三二四)、東歌には人麿歌集歌が紛れこんだかと考えられるもの(14・三四九〇)があり、防人歌には人麿作(3・二五四、二五五)が粉本となつたかと思はれるもの(20・四三八〇)もある。これらの東歌・防人歌の例は、詠歌を通しての、中央と東国との交流・影響関係の一端を語る。つまり、当時人麿の歌は著名であり、流動

していた。けだしこのような文化的情況は、人麿の作品が伝誦の世界との間に強い連続性・相補性をもつたため将来された。そうした情況のもとにあつては、伝誦・筆写のいずれの方法によろうと、人麿作品の一部が詩的創造力を喪つて自然発生的な——あるいは集団的な——転訛を生ずる機会は多かつたにちがいない。

万葉集に人麿作とされ、本文歌として扱われたものにも、この情勢は及んでいよう。そういえば、万葉編纂當時すでに人麿作歌と人麿歌集歌との間にも、疑わしいところがあつたらしい。というのは、卷二に或る本の歌として引いた二一三—二一六番歌、卷三の二五〇—二五六番歌に引いた一本のものや、卷一の四八番歌など、用字面から見ても、人麿歌集所出のものではなかつたかと思はれるふしがあるからである。しかりとすれば、万葉編纂當時すでに人麿作歌か人麿歌集所出歌か、区別できない情況が生じていたわけである。現に編者は、人麿歌集から出た二八〇八番の歌を「上に柿本朝臣人麿の歌の中に見えたり」と言っている。しかるに、その「人麿の歌」というのは人麿歌集の歌(11・二四〇八)である。なお卷九に引く人麿歌集の歌(一七一五—一七二五、一七二〇—一七二五の二説がある)について附け加える。一七一九番歌には左註があつて、「古記によりて」作品を採り載せた、か

くの如き類、下皆これに効え、とある。さすれば、人麿集(この左註の記事が一七二〇—一七二五番歌の人麿集所出歌を規定することには、問題がない)には古記から転載した歌があったはずである。それを転載するに際しては、辞句の変更がなされなかったとは言えない。その人麿歌集の歌、たとえば

恋しくはけ長きものを今だにもともしむべしや逢ふ
べき夜だに(10・二〇一七、人麿集)

のような歌はさらに

恋ふる日はけ長きものを今夜だにともしむべしや逢
ふべきものを(10・二〇七九、伝誦者不詳)

といった形に変えられてゆく。

三、異伝のない人麿の歌

関連的にここで言えることは、雑歌には、人麿作で異伝を伴うものの少ないことである。これは、何を意味するか。

それはたとえば、近江荒都歌に歌われたような歴史的情况のもとでの遷都は、当時の人人から批判的な眼でながめられたこと、宮廷挽歌は国家的傷心事を歌ったものとされたこと、石見相聞歌など、人間普遍の、物語的内容をもった作として宮廷社会の関心を集めたこと、など

の事情によるだろう。そうした場合、人麿の歌がとりあげられたとすれば、広く伝誦され、転写され、理會できないところは享受者の理會に近いところに引き寄せられただろう。近江荒都歌や石見相聞歌には、そうした痕跡は絶無であろうか。横山英氏が「石見之海 津乃浦乎無美」(2・一三八)は錯乱、「石見之海打歌山」(2・一三九)は誤伝であろうとし、「或本有謂之名耳聞而有不得者(句上)」(2・二〇七)にいうところは解しがたいと言(註七)い、高野正美氏が石見相聞歌の「磯無しと …… 荒磯の上」(2・一三三)、「津の浦を無み 浦無しと 人こそ見らめ 瀉無しと 人こそ見らめ」(2・一三八)、「明け来れば 浪こそ来寄れ 夕されば 風こそ来寄れ 浪のむた か寄りかく寄り」(2・一三八)、「妹が手本を露霜の 置きてし来れば」(2・一三八)、「ゆふの林」(2・一九九)あたりの表現や用語ははなはだしく不整であり、それは十分の理會を伴わないままに伝誦されたことを示すとしたのも、その辺の事情を説いたものである。高野氏は、これが作者による表現ならば、こんなに文脈のとのわかない、意味の通じない言いかたはほしくないはずだし、一方、伝誦者はそれを氣にとめず口誦するとした。こうした事態は、人心の機微に通じた伝誦者が類型をふまえながら、自由な連想を——また、偶然の変

化・飛躍を——作品にもたらしたところに生じた。

作品が転写される場合、その表記は必ずしも正確にされない。これを万葉の歌に見ても、たとえば

(1)暮去者 小倉乃山爾 鳴鹿者 今夜波不鳴 寢宿家
良思母(8・一五二一)

(2)暮去者 小椋山爾 臥鹿之 今夜者不鳴 寢家良霜
(9・一六六四)

(3)白浪乃 浜松之枝乃 手向草 幾代左右二賀 年乃
經去良武 二五作者経爾計武

(4)白那弥之 浜松之木乃 手酬草 幾世左右二箇 年
薄経濫(9・一七二六)

(5)風乎太爾 恋流波之 風小谷 将来登時待者 何
香将歎(4・四八九)

(6)風乎谷 恋者之 風乎谷 将来常思待者 何如将歎
(8・一六〇七)

の(1)(2)・(3)(4)・(5)(6)の記録者は、それぞれ校合資料を有し、あるいは同一資料から採用した(題詞・左註を参照)にかかわらず、局部に変形のあることは、一見して知られる。琴歌譜所載の、記紀歌謡と同一作品や、歌経標式に人麿作と称するものと、万葉所収の当該歌とをくらべて見ても、事情は同様である。

人麿作品における異伝が伝誦によるか、作者自身によ

る推敲のあとを示すかという問題については、いま一言わねばならぬことがある。それは、人麿作品の本文が作者の定稿であるなら、未定稿の異伝までも編者が併載したのは何のためであったかという問題である。端的に言えばそれは、万葉編纂当時、人麿作歌の本文を純正のものとして看做すにはなお問題があった——それは或る程度信頼されたであろうが——からではなかったか。そのことから思えば、異伝の併記は作者の推敲過程を示すというよりも(本文が定稿であるならば、歌集の編成に当って推敲過程を示すことなど、不要である)、その作品の伝来と資料価値との相関に多少の疑いもたれたためであることが察せられる。

(五六)
松田好夫氏と同様に、稿者も、一云、或云、或本歌を

本文以後の記録であるとばかりは思わない。この見解が正しいなら、異伝はあくまでも異伝であろう。そしてその多くは、推敲を示す作者の一案でも、未定稿そのものでもなかっただろう。つまり、人麿作品の多くは、伝来の途上で伝誦・転写をかさねることによって変形され、その或るものは推敲過程をすらとどめなくなつて居ただろう。それなればこそ、編者は当時の資料にもとづいて敢て記録し、後考を促そうとしたのではないか。松田氏は、万葉集は校本上代文学全集であるといわれたが、そ

これは結果的に校本的な姿のものになったままである。

そのことと併せ考えてよいのは、人麿には異伝を伴わぬ作品が相当にあることである。また、人麿歌集所出の短歌は三二〇首ちかくもあるのに、そのほとんどが異伝を伴わぬことである。これは一つには、編者が当該歌に關する対校資料をもたなかったことによるかも知れない。しかしもっと自然な事情は、それらの作を本文に立てて誤らないと判断できたからだろう。

これを要するに、小稿で言わんとしたところは、異伝歌・異伝句に作者自身の推敲を経たものはあるかも知れないが、そこになお作者の表現が純正に保存されていない疑いがある、というにある。つまり、伝誦や書写をかさねるうちに、一首の理路も混沌として訛伝となった公算が大きい、というにある。そのことは、人麿以外の作者の歌の異伝について考えれば、いっそうはつきりする。

万葉集中、人麿作の異伝のみが推敲のあとを示しているとは見られない。天智天皇が鏡の王女に賜った歌（2・九一）、中皇命が紀伊の温泉に行かれたときの歌（1・一二）、内の大臣藤原卿が鏡の王女に報え贈った歌（2・九四）、石川女郎が大伴宿奈麿に贈った歌（2・二一九）、但馬の皇女の歌（8・二五二）に見える異伝句などはむ

ろん、作者自身による推敲のあとを示すとは思われぬ。人麿とほぼ同時代の長ノ奥麿の応詔歌（9・二六七三）にしても、そうである。聖徳太子作と伝える歌（3・四一五）に至っては、伝誦によって本来の長歌の形が崩壊し、短歌の形式を獲得してゆく状況をさへ示している。そのことは、日本書紀所載の太子の詠と伝える長歌とくらべれば、いっそう明らかである。稿者は、万葉の編者によって人麿作と看做された作も、こうした時代の和歌史的情况の圏外にありえなかったと考える。

註一 松田好夫氏『万葉研究新見と実証』所収、「第一部形 成篇」

二 『万葉集を学ぶ』第二集「石見相聞歌」

三 高木市之助氏『雑草万葉』所収「民謡二題」

四 『万葉私考』所収「万葉集或本歌雑考」

五 上代文学会編『人麿を考ふる』所収「人麿の歌と異伝」

六 註一におなじ。